様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０４０９

研究課題名（和文）１８６０年代のドストエフスキーにおける文学と建築のトポロジー

研究課題名（英文）Topological analysis of Dostoevsky's St.Petersburg in the works of 1860s.

研究代表者
近藤　昌夫（KONDO, Masao）

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：８０１９５９０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,800,000円、（間接経費）　540,000円

研究成果の概要（和文）：1860年代に発表されたドストエフスキーのペテルブルグ小説のうち、『地下室の手記』、『罪と罰』および『白痴』における物語と都市空間の関係を分析した。その結果この時代のロシアが、原古のロシアでも揺籃期のヨーロッパでもないあらたな理想郷を、ペテルブルクではなくモスクワに象徴される全ロシアに求めはじめたことが明らかになった。ペテルブルクは、転換期と言われる60年代後半にヨーロッパを自覚し、「ヨーロッパへの窓」の役目を終えたのである。このことは建築様式におけるネオ・ロシア様式の模索とも一致する。

研究成果の概要（英文）：Having analyzed the urban spaces of Dostoevsky's major fictions of 1860s, it became clear that Russia, which found itself as Europe at that time, begun to seek for a new Utopia different from both the ancient Russia and the cradle of European civilization not in Petersburg, but in all Russia. This coincides with the change of the architectural style:neo-russian style came into fashion especially in Moscow.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ロシア　都市　文学　ペテルブルク　道化

１．研究開始当初の背景

まず全体構想として、ロシア近代文学の特徴を、都市（ペテルブルグ及びモスクワ）を触媒にして明らかにすることがある。

全体構想に基づき、本研究に至るまでの約 10 年間に、「幻想都市」ペテルブルグを舞台にした文学作品をとりあげ、都市空間・物語・人間の相関関係に注目しながらテクストの分析作業に従事した。1830 年代から約 10 年刻みで時代を代表する作家の文学テクストを選択・分析した。具体的には、ペテルブルク神話の創始者プーシキン（1830 年代）とモニュメント「青銅の騎士」、ゴーゴリ（1840 年代）と「橋」、初期ドストエフスキー（1840 年代）と「運河」、流刑時代のドストエフスキー（1850 年代）と「シベリア」、ガルシン（1880～90 年代）と「ペテルゴフ」、ペールイ（19 世紀末～20 世初頭）と「島」の関係に注目して、ペテルブルク神話を明らかにする作業を行った。

60 年代後半～70 年代については空白であったので、以上の研究成果を踏まえ、本研究では、同時代小説家とも言われるドストエフスキーの 60 年代の作品すなわち『地下室の手記』（1864）、『罪と罰』（1866）および『白痴』（1868）を分析対象に選ぶことにした。

２．研究の目的

ロシアは 1860 年代に、技術・産業が急成長し、社会が大きく変動した。クリミア戦争で敗北を喫し、近代化に拍車がかかる「転換期」の首都で、急速に変化を遂げる都市の物語はどのように人間を描いたのか。本研究では、ドストエフスキーのペテルブルク神話を、プーシキン、ゴーゴリのそれに照らして解読することで、表象された「ロシア」を都市空間との関連から解明し、都市文学の文脈で相対化することを目的とした。

３．研究の方法

基本的方法は、『地下室の手記』と『罪と罰』に共通するトポス「十字路」の比較である。

いずれも結末に描かれ、主人公の内面と強く結びついた都市空間あるいは詩的空間になっている。『地下室の手記』では、語り手の「俺」が黄色く湿っぽい雪まみれになって手記に封印され、『罪と罰』では、ソーニャに促されるまま十字路に佇むラスコーリニコフが全身炎のように熱くなる。

比較検討に際して設定した主な課題は、共通する空間が、対照的に表現されているのはなぜなのか、という点であった。

この主要課題解明のため以下の点に留意した。

(1)ドストエフスキーが、『地下室の手記』で 40 年代と 60 年代を対比していること。
(2) 『地下室の手記』の「俺」が、40 年代の自分を、「手記」というドストエフスキーの好んだ形式に封じ、60 年代に回想していること。
(3)『地下室の手記』でドストエフスキーが最も重視していたロシア正教に関連する箇所が検閲によって削除されたこと。
(4)「地下室」が原題では「床下」であること。
(5)『罪と罰』が、飲酒によってもたらされた社会問題をセンナヤ広場の十字路を舞台に描いたこと。
(6)『罪と罰』で、社会に格差や頽廃をもたらしたウォッカがビールと周到に区別されていること。

分析結果については、ペテルブルクとパーヴロフスクが対比される『白痴』（1868）によって検証することにした。

また、空間のリアリティを少しでも実感するために、現地調査に赴いたことも方法のひとつである。

４．研究成果

本研究で得られた成果は、以下の通りである。テクスト分析の時系列順に成果をあげてゆくが、(4)⑸⑻はとくに強調したい成果である。

(1)『地下室の手記』の「俺」が願望した「水晶宮」が（検閲によって削除された箇所）、ペテルブルグを土台とするキリスト教的ユートピアの暗示であったことが、『罪と罰』の分析で確かめられたこと。

(2)40 年代の『分身』の改訂は、ゴーゴリの模倣からの脱却であり、『地下室の手記』の「床下」を出口とする冥界巡りの入口にあたることを論証したこと。換言すればドストエフスキーが、自身の流刑体験を作品に反映させたことを、作品にそって具体的に示すことができたことである。

(3)『死の家の記録』『虐げられた人たち』あるいは『未成年』にも用いられる「手記」という、ドストエフスキーの好んだ形式が再生の形式であることが『地下室の手記』でも再認されたこと。

(4)『罪と罰』が、『地下室の手記』の「俺」の願望を継承し、同じ十字路を入口として、シベリアに至る巨大聖堂建立物語であることを論証したこと。

(5)『罪と罰』で、ウォッカとビールがドストエフスキーによって意図的に対比されていることを指摘し、これまでの『罪と罰』研究で指摘されたことのなかった斬新な切り口を提示できたこと。ドストエフスキーは、

①ウォッカによって貧困・道徳的頽廃・家族崩壊など同時代の社会問題を鮮明に切り出したのである。

②ビールから、民間信仰とキリスト教信仰が習合した、教会建立の祭り「セミーク＝トロイッツァ」の祝祭を呼び出したのである。

⑹キリスト教と民間信仰が融合した祝祭を呼び出したことで、ドストエフスキーが同時代のペテルブルクに神話を見出していたことが明らかにできたこと。

⑺「セミーク＝トロイッツァ」は、『虐げられた人たち』のネリーにもあらわれるルサールカの形象と関連がある祝日であり、『分身』に始まる冥界巡りに連続性が指摘できたこと。

⑻物語冒頭のラスコーリニコフの悪夢と、センナヤ広場を中心とする物語の主要な舞台が、位相的に重なることを論証できたこと。

⑼エピローグの流刑先シベリアが、『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老の荒野修道院と符合すると指摘し、作品の連続性を明らかにできたこと。

(10)『罪と罰』の聖堂構造を明らかにしたことで、ドストエフスキーが『白痴』でキリスト公爵を描いたのではないか、との仮説に裏付けを提示できたこと。

(11)物語の位相に注目して『地下室の手記』と『罪と罰』を分析した結果、『白痴』におけるスイス山中とペテルブルク、ペテルブルク中心部と郊外のパーヴロフスクの対比が物語解釈にとって重要であることを指摘できたこと。

(12)『白痴』第１部のエカチェリンゴフが、60 年代にオーケストラをかかえるミュージックホールで、パーヴロフスクも駅と直結したミュージックホールだったことが、フィールド調査によって実際に確かめられたこと。

(13)ドストエフスキーの作品における「ルサールカの系譜」から、『白痴』のアグラーヤが揺籃期のヨーロッパの美を象徴し、ナスタシヤは原古のロシアの美(ベレギーニ)を象徴していることを指摘できたこと。

(14)アグラーヤとナスタシヤの関係が、『未成年』のヴェルシーロフとマカール老人の関係に対応していると指摘できたこと。

(15)一連の分析結果によって、ドストエフスキーが、40 年代の『分身』から 60 年代の『白痴』に至る冥界巡りを構想し、新たな「美」によるロシアの救済を『未成年』に託したことが確かめられたこと。

(16)70 年代に入ってヨーロッパをあたりまえのように自覚するようになったロシアが、新たな形式を、文学のみならず建築でも模索するようになったことを明らかにできたこと。

(17)これら一連の成果によって、18 世紀初頭に西欧化を目指したロシアが、19 世紀 30 年代に、西欧と対等の政治的・文化的水準を自覚し始め、70 年代には、たとえばドストエフスキーに見られるように、精神的な優位性を主張するまでになったことを相対化できた。
　これをもとに、過去 10 年間の論文をまとめ直し、『ペテルブルク・ロシア　文学都市の神話学』（未知谷）を上梓できたことは大きな成果である。

(18)また、次の新たな展望・仮説・問題が得られたことも成果である。

①『罪と罰』のエピローグで、ソーニャとイルティシ川の川向こうを眺めるラスコーリニコフの脳裏に、ヨハネの福音書にある旧訳の牧歌的時代が浮かぶのは、ラスコーリニコフがイコノスタスの「デイシス」を感じたからではないかという仮説。

②『未成年』に描かれるペテルブルグとモスクワの関連から、ロシアの新しいイメージが具体的に求められるのではないかという仮説。

③20 世紀の前衛芸術家たちのプリミティヴィズムは、近代に西欧３次元を憧憬したペテルブルクと中世ロシアとの闘争があったからではないかという、文学に限定されない芸術一般に通用する展望が得られたこと。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
①<u>近藤　昌夫、</u>「緑の聖所」、スラヴィアーナ第 5 号、2013、日本スラヴ人文学会年報、査読有、pp.47-71.
②<u>近藤　昌夫、</u>「十字路から聖堂へ」、スラヴィアーナ第 4 号、2012、日本スラヴ人文学会年報、査読有、pp.90-95.

〔学会発表〕（計 3 件）
①<u>近藤　昌夫、</u>「『白痴』のパーヴロフスク」関西大学東西学術研究所.（2013 年 2 月 10 日）.関西大学児島惟謙館.
②<u>近藤　昌夫、</u>「十字路から聖堂へ」関西大学東西学術研究所.（2012 年 2 月 22 日）.関西大学児島惟謙館.
③<u>近藤　昌夫、</u>「ドストエフスキーの十字路」関西大学東西学術研究所.（2011 年 2 月 20 日）.関西大学児島惟謙館.

〔図書〕（計 4 件）
①近藤　昌夫、単訳ザイツェフ『チェーホフのこと』未知谷、2014 年 3 月、301 頁。

②近藤　昌夫、単著『ペテルブルグ・ロシア文学都市の神話学』未知谷、2014 年 1 月、461 頁。

③近藤　昌夫、共編著『文化の翻訳あるいは周縁の詩学』水声社、2012 年 9 月、233 頁、185 頁～229 頁。

④近藤　昌夫、共著『バッカナリア』成文社、2012 年 3 月、89～119 頁。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

[書評]
「親日家の生涯等身大で」(中村健之介著『宣教師ニコライとその時代』講談社現代新書)、北海道新聞（朝刊)、2011 年、6 月 12 日.

[新聞記事]
「ドストエフスキーの祝祭的世界」北海道新聞（夕刊)、2012 年、7 月 27 日.

[市民講座]
毎日文化センター「ペテルブルグ文学散歩」（2012 年 11 月 24 日､12 月 8 日､12 月 22 日）.

６．研究組織
(1)研究代表者
近藤　昌夫（KONDO MASAO）
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号：80195908

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：